

GF EVENT

公開ブックトーク:加納実紀代さん『高群逸枝と母性主義』

2016年4月23日(土)、GF読書会が加納実紀代さんを講師にお呼びして、公開ブックトークを開催しました。『高群逸枝全集』から排除された、高群のもう一つの顔——それを正面から取り上げた加納さんの論考「高群逸枝——その皇国史観をめぐって」(所収『女たちの銃後』増補新版、インパクト出版会、1995年)を中心に、活発な議論が繰り広げられました。加納さんの発表は約1時間半に及びましたが、最後の一部を以下に抜粋します。

高群の母性主義は戦争中、天皇制と癒着して戦争を推進するものとなりました。なぜそうってしまったのでしょうか。1937年、文部省は、世界に比類なき天皇制の素晴らしさを教えるため、『国体の本義』を出しました。これを読んでみると、非常に母性的なんです。『国体の本義』には愛という言葉がやたら出てきます。天皇は国民を「赤子」として「愛撫」し「愛護」し「愛養」する。つまり母性のメタファーが、天皇と国民の関係に移し替えられているわけです。それについて私は、「母性主義とナショナリズム」でこんなふうに書きました。「『国体の本義』によれば、『日本の国家は天皇を祖として〈自然〉に生まれた家族国家であって、

(…)天皇と国民の関係は支配服従ではなく、親子のように自然な関係にあるというのだ。その親子関係は、父と子というよりは母子関係である。父は〈自然〉を背負えないからだ。父は「認知」という制度を経ないかぎりわが子をわが子としない。」

この『国体の本義』の天皇賛歌と高群の自然による母性賛歌は、非常に近いと言えます。そして彼女は、「家族心は日本国体のよって立つ原理であり、ついに世界救済の福音たるべきもの」として侵略の論理である「八紘一宇」を正当

化しました。

なぜいま高群は評価されなくなったのか。今見てきたように彼女の皇国史観は隠蔽されていたわけですが、それが明らかになったこと。またジェンダー論の登場による母性本質主義への批判が起こったことがあるでしょう。もう一つ、大著『招婿婚の研究』ですね。1963年、私が安い初月給をはたいて買って神棚に飾っておいたほど、この本は名著と言われていたのですが、栗原弘さんの『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』によって意図的な資料操作が明らかになりました。これは大きかったと思います。

ところで、高群の母性主義に今日的意義はないのでしょうか。私は、現在の自己責任を強調する新自由主義に危機感を抱いています。その中で、フェミニズムの新しい動きとして出てきたアンペイド・ワーク論や、依存を基礎にした解放論であるマーサ・ファインマンの『家族、積み過ぎた箱舟』やエヴァ・フェダー・キティの『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』などには、高群が提起したものと響き合うものがあります。海外の新しいフェミニズムの紹介はもちろん大切ですが、高群の提起したものを、その問題性を腑分けしなが



▲ジェンダーフリースペースにて

ら、そこから何かを汲み取ることも必要ではないかと思えます。

とはいうものの、今の戦前回帰の状況では安易な再評価はやはり警戒しておかなくちゃいけないと思います。

(紹介文・テーブル起こし：馬場淳・現代社会学科)

※加納実紀代さんの講演映像は、次のウィメンズアクションネットワーク(WAN)のウェブページでご覧になれます。

<https://wan.or.jp/article/show/6959>

GF EVENT

市民講座『BL的想像力の変容 ～欲望、表現、そして社会へ～』 中村明日美子×溝口彰子（聞き手）

2016年10月15日（土）、『同級生』シリーズなどで多くの支持を集める漫画家・中村明日美子さん（和光大学出身）と、『BL進化論』でBL評論の新たな地帯を開いた溝口彰子さん（和光大学非常勤講師）をお迎えして、トークイベントを開催しました。当日は、300人の参加者が会場を埋め尽くし、BLへの熱い思いと語りが壇上とフロアに満ち溢れて



▲大勢の方で埋め尽くされたイベント会場



▲二人の絶妙なトークが会場を盛り上げる

いました。以下は、参加した本学学生たちの感想です。

シンポジウムの中で「BLを通して女性も猥談ができるようになった」という言葉が出た。異性愛だと生々しくなってしまうものを男性同士の恋愛で語ることによって、現実で求めるものとは別次元の話が可能になる。猥談は男性のもの、女性は奥ゆかしさを求められ、いわゆるポルノに触れることなんてありえないという風潮が強い日本において、これはとても大きなことだ。無意識のうちに抑圧されていることに、私自身改めて気が付いた。BLは、一見セクシュアルマイノリティだけの問題のようだが、実は女性学・男性学にも繋がるテーマであった。

私も中村明日美子さんの著作『同級生』を拝読した。今までは純粹に娯楽としてBL作品を読んできたが、シンポジウムに参加した上でもう一度読んでみると、溝口彰子さんが仰っている「進化形BL」、同性愛嫌悪が社会にあると認識した上でそれを不自然ではない形で乗り越えようとするそれが描かれていた。異性愛を扱った作品であっても「恋愛もの」は「山あり谷あり」である。そこに、同性同士であることによって起こってくる障害や、それがあっても尚相手を愛する気持ちというものがプラスされる。性描写は自分たちに置き換えられないため生々しくなく、一方で存在する「恋する過程のリアルさ」が、特に近年、進化形BLを支持する女性の多い理由なのだろう。その結果、和光大学に多くのファンが集まった。質疑応答の時間にそのすべての質問者の方が「この場を設けてくださってありがとうございます、中村先生大好きです」と仰っていたことが印象的であった。

(藤井ゆきこ・総合文化学科)

お二人の対談では、あらかじめ寄せられた質問に回答しながら、最近メディアに取り上げられるようになった“BL”が人や社会にどういった効果を与えているのかということが語られていたように思う。中でも、「日本ではある程度世間で浸透してから法制度ができる傾向にあり、BLは同性愛を“見慣れる”ための一片になり得るのではないか」という明日美子先生の意見に希望を感じた。

私は、女性向けのフィクションであるBL作品が露出し、ゲイへの誤ったイメージが定着してしまうのではと少し怖かった。しかし、溝口先生が、「明日美子先生の作品のように、ゲイの人達が生きていく際にある壁を乗り越えるすべを現実的に描いているもの等、BL作品の幅がとても広がっている」「『俺は男が好きじゃあない!』と頑になる…といったBLは“古典的なBL”として現実のゲイと区別されて認知されるのではないか」と述べられて、BL作品の今後の

あり方をイメージできた。

今回の対談を聴いて、BLが娯楽の1つであり、同性愛というものを知るきっかけとして今後も発展していった欲しいと私は思った。

(星野史織・芸術学科)

会場に入ったときの衝撃は凄まじいものであった。それは「読者も九九パーセント以上が女性だろう」という『BL進化論』通りの現実がそこあったから——というのも当然あったが、それ以上に衝撃を受けたのは、場の空気の一部感であった。

「ホモフォビア」や「LGBT」といった社会的な視点。「当事者ならばどうするか」という発想が持つ危険性。「拉致／監禁」(＝過剰な愛情の発露としての「レイプ」という仕掛け)や「俺はホモなんかじゃない」(＝「デフォルトとしてのノンケ状態」という発明)などに見られる90年代定型BLの特徴(『BL進化論』第2章)や、それを現代において表現するさいに求められる相応の動機づけ。「神」あるいは「壁」の視点や、『同級生シリーズ』の裏話。これらの大方の要素は理解していたつもりであったというのに、それでも終始「自分のような新参加者が、この場にきてよかったのか」と、強く感じていた。

自分はBL作家・愛好家の人々の実状、はっきり言ってしまうと「パワー」を知らなかったのだ。溝口先生の「拉致／監禁」で噴き出る笑いや、明日美子先生の「技術論」をまるで自身のスキルアップのために吸収しようとメモする人たちを見て、自分は中途半端に知識を得た傍観者か、本当に足を踏み入れるにはまだ近づけないレベルなのだと感じ取ったのだった。

ただ、それは隔たりを感じたという意味ではない。むしろ、そのパワーから「尊敬」や「憧れ」のようなものを受け取り、あるいはもう少しだけ近づきたいという意識を確認したのであった。

ある人々はBLを拒むかもしれないが、BLは人々を拒まない。性別を問わず性指向を問わず、ためらっている人へ。

「腐っている女性が娯楽として消費するもの」という偏見を捨て、恥ずかしがらず書店で新刊を手にとってほしい。新しい知見やヒントを与えてくれるはずだ。

(山田光・現代社会学科)

GF EVENT

デートDV防止啓発講座

東京都町田市男女平等推進センターによるデートDV防止啓発講座が、2016年11月10日(木曜5限)に開催された。今回は、講師として東京弁護士会所属の本多広高弁護士と梅本遙弁護士にお出でいただき、「法と人権」(徳永貴志准教授担当)の受講者を中心に160名程の参加者が熱心に聴き入った。



▲「対等な関係つくれる？」と問いかけるデートDV講座

講座は、まず13項目の「事前チェックリスト」から始まり、学生によるロールプレイへと進んだ。チェックリストにはDVにつながりやすい考え方が並び、デートDVのきっかけは身近な日常に潜んでいることを実感する。お二人の弁護士のお話は実にリアルで、思わず鳥肌が立つ。実際に担当された事件やメディアでも注目されたストーカー殺人事件(桶川・三鷹)などの事例に基づいて、ありふれた恋愛が殺人事件に発展していく過程が示された。「好きだ」という気持ちがなぜ暴力につながるのか。その原因の一つに「男らしさ／女らしさ」というステレオタイプの考え方があるのではないかと指摘がなされた。例えば、男らしさは「ドSキャラ」、女らしさは「ひかえめがカワイイ」。そんな「〇〇らしさ」の固定観念がDVの根底にあるのではないかと。しかも、芽吹いてしまった暴力の連鎖は、とどまるところを知らない。暴力の後の優しさと穏やかさは、加害者の次のストレスにつながり再び暴力を生む。この暴力のループはどんどん拡大し、被害を深刻にしていくのだそうだ。

さらに、ネット社会がもたらす性被害にも話が及んだ。三鷹ストーカー殺人事件では、被害者のプライベート写真がネットに流され、世界中に拡散してしまった。「リベンジ・ポルノ」と呼ばれるこの被害には終わりが無い。また、簡単に視聴できるアダルトビデオと現実の性愛との混同による深刻な性被害も後を絶たないそうだ。身近なネットに関わる性被

害からどうやって身を守るのか。現代社会を生きる上で真剣に考えなければならないことだ。

もちろん、DVは異性間だけで起こるものではない。「性のありよう」は人それぞれであり、「恋のかたち」も人それぞれである。しかし「こうあるべき」という特定の固定観念は、様々なトラブルをもたらし、差別を生み出すこともある。両弁護士が「ありのままの自分を大切にしましょう」と強く訴えていたのが印象的だった。

私たちは、対等な人間関係のあり方をしっかり考えなくてはならないし、他者との心地よい距離の取り方を探る努力を惜しんではならない。それは、どんなに親しい間柄でも同じである。「この恋（関係）、なんだか辛すぎる」と感じたところから、恐らくDV被害は始まっている。これは誰の身にも起こりうることだから、「困ったらすぐに誰かに相談しましょう！」という呼びかけで講座は終了した。こじれる前の早めの対応こそが、最悪の事態をくい止める処方箋なのだ。

（阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ）

講座を受けた学生の感想

デートDVという言葉を知りました。最初、自分には関係のないことだろうなと思いながら講演を聞いていました。講演の前半で紹介されていたストーカー殺人事件の話のときには、怖いなとは思いつつも他人事として捉えていました。しかし後半になって女子高生の体験談のDVDを観たとき、自分も体験したことのある話だったので急に鳥肌がたちました。他の男の子と連絡を取っているときに、返信が遅いと怒られたり、嫌がられたり、返信を催促するメールが何度も来たりといったことは、まさに私も経験したことでした。「もしかすると自分もデートDVに遭っていたのではないか!？」と気づかされました。その後に話されたいくつかの事例のなかにも、他人事とは思えないものが含まれていました。そして講演が終わりに近づく頃には、自分の友人や他の人たちにも、デートDVのことを知ってもらいたいと強く思うようになっていました。一時の幸せや優しさに吞まれて、本当の自分の幸せや友人や異性との正しい付き合い方がわからなくなってしまうことがないよう、私自身も気をつけたいと思います。

DISCUSSION

GF読書会・前期報告 『女性の自立を考える』

2016年度前期は、NHK連続テレビ小説「あさが来た」(2015年10月～2016年3月放送)の原案となった古川智映子著『土佐堀川―広岡浅子の生涯』と、広岡浅子著『一週一信』所収の自伝を読みました。主人公は女性実業家で日本女子大学創立の後援者となった実在の人物、広岡浅子です。

時代は江戸時代末期、1849年（嘉永2年）京都の名門の商家三井家に生まれ、17歳で大阪の大両替商に嫁いだ浅子は、何不自由なく育ったうらやましいくらいの超お嬢様。「女子には学問は不要」という考え方の中で、お茶やお琴、裁縫など江戸時代の商家の娘に必要な女子教育の様子が描かれています。浅子も何不自由なく育てられたとはと言っても、学問を禁じられ、自分で人生選択ができるわけもなく三井家の意思のままに嫁ぎます。

嫁ぎ先の夫の理解もあり、商いを覚えたいという浅子の希望がかなえられ、嫁いだことで浅子は自由になったかのような感じを受けます。江戸幕府が倒れ明治維新へと社会や経済状況が大きく変革し、商家も今までのやり方では生き残れない時代の中で浅子の商才が発揮されていくのです。

その後「日本国で初めての女子大学設立」という意思を持った、成瀬仁蔵との出会いから女子教育に尽力をした浅子ですが、読書会の中では日本の女子教育の歴史にも着目して意見が交わされました。

商家に限らず、150年余り前の女性が学問をすることは非常に困難なことでした。女性が学問を自由に選択できるようになったのはいつごろからでしょう。時代や状況が変わったとはいえ、女も学問をしたい、自立したいという浅子の思いは古い時代の話ではないように感じます。NHK連続テレビ小説で取り上げられることで一躍有名となった広岡浅子ですが、強い意志を持った女性が主人公として受け入れられたこ



▲楽しく、しっかり勉強するGF読書会メンバーのみなさん（井上輝子先生宅にて）

とに少なからず時代の変化を感じます。

「勉強をし、しっかりと働き、世の趨勢を見極めていく。それが真の女性の自立というものではないのだろうか」(『土佐堀川—広岡浅子の生涯』潮文庫P164)。浅子の強い意志や行動力に圧倒されるばかりでした。「ここまではムリです…。」「浅子さん、少しぐらいなら頑張ります。」というつぶやきをしている自分がいました。

(鈴木幸子・GF読書会メンバー)

DISCUSSION

GF読書会・後期報告

2016年度後期は以下のテキストを輪読しました。

- ①『「暮しの手帖」とわたし』(大橋鎮子著、暮しの手帖社、2016年)
 - ②『花森安治伝——日本の暮しをかえた男』(津野海太郎著、新潮社、2013年)
 - ③「暮しの手帖を読み直す」(秋山洋子著『フェミ私史ノート——歴史を読む直す視点』、インパクト出版会、2016年)
- ジェンダーフリースペースには、寄贈して頂いた「暮しの手帖」のバックナンバーがあります。2016年「暮しの手帖社」の大橋鎮子をモデルとしたドラマが放送されたのを期に、後期は「暮しの手帖」に関する文献の輪読を行いました。

「暮しの手帖」は大橋と花森安治が中心となった編集部で編まれ、世に広められました。生活に根差した記事と徹底した商品テスト。半世紀後の現在においても、その誌面構成の斬新さと美しさは色褪せません。このような雑誌はどうやって生まれたのか、そしてこの雑誌は私たちにどのような影響を与えたのか、など各自が考えた意見を交換し、議論しました。花森はずいぶんと「男性的」(?)な人物であったようですが、読書会では「暮しの手帖」と現在の男性雑誌との共通点が指摘されました。実は女性だけを対象にした雑誌ではなかったようですね。また「暮しの手帖」は現在の多くの雑誌の原点であり、日本の高度成長期の時代背景が生んだ独特の雑誌ではないだろうか。そんな感想も聞かれました。後期は雑誌「暮しの手帖」の研究の奥深さを実感しながら、それぞれの視点から関心を深めることができました。

振り返ってみると、2016年度も、GF読書会は特別イベントを企画してきました。すでに本号冒頭で紹介されている加納さんのブックトークのほか、『憲法カフェ』も開催したことを追記したいと思います。5月26日(木)、憲法学を専門とする徳永貴志准教授(本学経済学科)を招き、日本国憲法の生

い立ちや立憲主義の考え方、他国の憲法との違い等について詳しく説明していただきました。2017年度も引き続き、GF読書会は、ジェンダーフォーラムやウィメンズアクションネットワーク(WAN)と連携しながら、面白い文献研究やイベントの機会を設けていく所存です。

GF読書会は、学内外を問わず、どなたでも参加できます。ただし、参加に当たっては、いくつかのお願いをする場合がございます。関心をお持ちの方は、末尾の連絡先までご連絡ください。

(阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ)



▲ジェンダーフリースペースでの読書会風景

GF EVENT

2016年度 卒論発表会

2017年1月18日(水)にジェンダーフォーラム主催の卒論発表会を開催しました。今年度は3名の4年生が論文と作品を披露しました。どの発表も、執筆・制作に真摯に向き合ったことがわかる充実した内容で、その成果も十分に意義のあるものでした。以下でその内容を簡単に紹介します(発表順)。

(1) 安田文菜さん(現代社会学科)『アニメ「美少女戦士セーラームーン」における多様な性表現とその攪乱性——ジェンダーの行為遂行性を暴露する可能性に注目して』

安田さんが分析したアニメ『美少女戦士セーラームーン』の放送が始まったのは1992年。それから四半世紀の間、このアニメ作品は、性別や親密な関係性のあり方に関する「当たり前」を裏切るユニークな登場人物や物語によって、視聴者の少年少女のみならず、多くの研究者の関心を集め続けてきました。安田さんは、先行研究が取り上げていない性別越境的なキャラクターに注目し、それらがジェンダーやセクシュアリティにおいてどのように多様に描かれているのかを緻密

に記述しています。『セーラームーン』では、個性的な外見やふるまいのキャラクターたちが性別を軽やかに行き来するのですが、その自由な往来は、「男／女である」ことは「自然」や「本質」ととらえられるようなものではなく、他者との相互行為のなかでその都度立ち上がるリアリティなのだとこのことを見る側に確認させます。安田さんの研究は、『セーラームーン』における多様な性の表現が、性別を脱自然化するというジェンダー攪乱的な効果をもちえることを説得的に論じました。

(2) 山田光さん(現代社会学科)『「女子力男子」は男性の多様性へとつながっているのか』

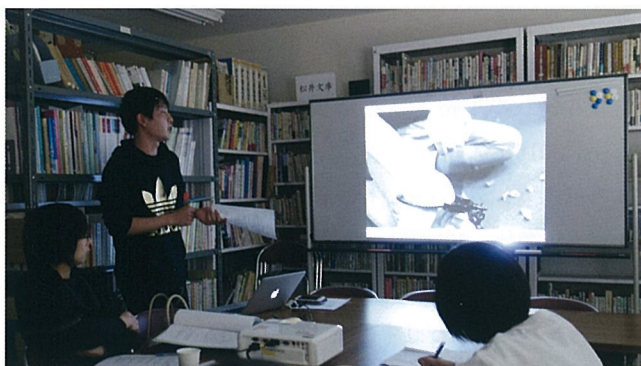
山田さんの研究は、ここ数年の間にメディアで見られるようになった「女子力男子」という概念の変容を分析したものです。山田さんは当初、この言葉が「男らしさ」から男性を解放し、男性の選択肢を拡げるようなインパクトを有するものになることを期待したそうです。しかし、その使われ方を詳細に分析したところ、「女子力男子」は、山田さんの期待を見事に外すかたちでその意味を変質させていったことがわかりました。とりわけ「若者マーケティングのパイオニア」とされる原田曜平が2014年末に出版した『女子力男子』（宝島社）は、若い男性向けの新規市場の存在を「ねつ造」するために、「女子力男子」を単なる消費者とだけ位置づけた点で罪深く、この本以降「女子力男子」は、どんな「女らしい」特徴とも関連づけられる空虚な、しかしだからこそ、メディアにとっては使い勝手のよい概念として利用されていくことになりました。最近では、料理上手で美意識が高いだけでなく、他者への配慮や共感力などをもち合わせる「仕事ができる男＝モテる男」が「スーパー女子力男子」として誌面に登場しており、男性への過剰な期待がこの概念を通じて表現されるようになっていきます。山田さんは最後に、こうした「女子力男子」をめぐる言説が、多くの男性を恋愛や結婚から疎外する可能性を指摘しました。

(3) 五味右匡さん(総合文化学科)『セクシュアル・マイノリティのメッセージ』

五味さんは、セクシュアル・マイノリティからのメッセージを込めた『The Ends of Pain (痛みの果てに)』というタイトルの写真集を制作しました。性別や性愛のあり方において「非典型」と見なされる人々へ向けられる偏見や差別は、多くの人々に「痛み」を、また時には「死」をもたらす暴力です。五味さんは、アメリカ合衆国でゲイやトランスジェンダーがヘイトクライムやいじめによって殺された事件が日本でほとんど報道されず、かれらの痛みへの想像力がなかなか

育たないという問題意識にもとづいて、セクシュアル・マイノリティの経験を写真というかたちで表現したいと考えました。五味さんの写真集は、被写体を通して「性の多様性」を雄弁に伝えながら、差別の現実と痛み、カミングアウトがもたらす葛藤、その先にある生のありようなどを描いています。作品の完成度を支えたのは、五味さんが大学時代に培った学外の人脈でした。多くの友人たちが撮影に無償で協力してくれたそうです。この企画が人々を結びつける場となったことがうかがえ、写真集を作るプロセスも成果のひとつであることを再確認しました。

(杉浦郁子・現代社会学科)



▲ジェンダーフリースペースでの卒論発表会

GF INFORMATION

『GF通信』は2016年度(28号)から年一回の発刊となりました。公開講座・イベントの告知・報告など、GF活動の情報は和光大学ジェンダーフォーラムの公式ホームページ(下記)上に随時アップしております。なお本HPから、『GF通信』のバックナンバー(PDF)を入手することができます。

* 和光大学ジェンダーフォーラム公式ホームページ

<http://www.wako.ac.jp/organization/gender/>

* ジェンダーフォーラムの活動、GF読書会に関するお問い合わせ先：和光大学ジェンダーフォーラム

gen-free@wako.ac.jp (阿野)